



Title	Almayer's Folly に見る幻想の構造
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1987, 28(1), p.1-13
Issue Date	1987-07
URL	http://hdl.handle.net/10069/15235
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T10:24:30Z

Almayer's Folly に見る幻想の構造

中 村 嘉 男

The Structure of Illusion in *Almayer's Folly*

Yoshio NAKAMURA

I

Conrad が *Almayer's Folly* の主人公 Almayer のモデルになった “Olmeijer”¹ に始めて出会ったのは、彼が蒸気船 Vidar 号の一等航海士として 1887 年の 8 月から翌年 1 月まで Singapore と Borneo の東海岸にある Blungan の間を往復していたときであった。² すでに色々なところでこの男の噂を聞かされていた Conrad は、だらしのないパジャマ姿の彼を直接見て余程強い感銘を受けたのだろう、*A Personal Record* の中で、“... if I had not got to know Almayer pretty well it is almost certain there would never have been a line of mine in print.”³ とまで言っている。この言葉を Ian Watt は、Conrad に特徴的な “offhandedly preposterous exaggeration”⁴ と見ているが、あながちそうとばかりも言い切れない面がある。なぜなら、幻想に支配されて生きる人間の哀れな宿命を見つめ続けた Conrad にとって、はかない夢に空しく操られる Olmeijer または Almayer は、単に忘れ難い存在というだけではなかったと思えるからだ。思うに Conrad は、非現実的な夢に取り憑かれて破滅していく Almayer を彼を取り巻く厳しい環境の中で思い描きながら、自分が以前からもっていた人間観を改めて確認し、また発展させていったに違いない。その結果で上がった作品には、幻想に操られる人間の愚かさや哀れさが徹底して凝視されており、その凝視の姿勢は、Conrad のそれ以後の作品に一貫されることになるのである。

しかし、*Almayer's Folly* のこのような重要性にもかかわらず、その作品と主人公の Almayer の意義を理解しようとしぬ研究家は意外に多い。Conrad について一冊の本まで書きながら *Almayer's Folly* をまともに取り上げない論者も多

い中で、Albert. Guerard や R. A. Gekoski などはその作品に対して比較的多くのページ数をさいている方だが、その二人でさえ、夢に耽って無為の日々を送った Almayer より、その Almayer を養女の婿にして Borneo の東海岸の村（小説では Sambir と呼ばれている）に住ませた行動の人 Captain Lingard の方を中心人物にするべきだったと言っている始末なのだ。その理由として両研究家はそれぞれ、Lingard の方が Almayer より “a character of greater intrinsic interest” であるからとか、“a richer and more complete figure” だからとか述べている。⁵ 確かに Lingard は、その全盛時において “‘the Rajah-Laut’ — the king of the Sea”⁶ としての盛名をほしいままにしながら、後年にはその居所ばかりか生死さえ分からないほど落ちぶれて、その人生の変化の激しさはきわだっている。しかし、だからと言って、単純に彼の方が Almayer より興味深い人間だとか、より豊かで完成された人物だとか言うことはできないのである。マレー人の養女を絶対に白人に嫁がせなければならぬと思いつこんでいる Lingard の善意の裏に潜むセンチメンタリズムと差別意識は、その愚かしさにおいて、Almayer のそれと大差ないし、この二人の男性のものの見方や感じ方の自分本位な単純さも大同小異である。この二人を大きく分けるものがあるとすれば、それは、結婚した Almayer に娘がいるのに、独身を通した Lingard には実の子がいなかったということぐらいであろう。何でもないようにみえるこの差が、実は、一人を処女作の主人公にし、他方をその脇役にしたものだと思われる。

というのも、Conrad のほかの作品の登場人物で Lingard にその人柄と境遇が似ていながら、熱愛する実の娘がいたばかりに、作品の主人公になっている人物がいるのである。それは、“The End of the Tether” の主人公 Captain Whalley である。Lingard と同じように Whalley も、壮年期には東南アジア一帯にその盛名を知られて羽振りをきかせていたが、晩年には持船をすべて手放して雇われ船長として細々と暮さなければならなくなる。その Whalley が Lingard と違って作品の主人公になりえたのは、彼に薄幸の娘が一人いて、その娘を哀れむあまり、彼が自らを死にまで追いつめてしまうからである。愛ゆえに死に追いこまれていく彼の姿には深く人間的な問題が含まれており、そのため彼は作品の中で圧倒的な存在感を漂わせるのだ。

Almayer がこの Whalley と性格や経歴を大きく異にしながら作品の主人公になれたのも、前者が後者同様実の娘をもっていたうえ、娘への思いのために自滅していく点でも後者と似かよっていたからである。娘への愛は結局、Almayer's Folly と “The End of the Tether” の両作品において、破壊的要素として重要な

機能を果たしていると言える。愛そのものは本物でも、その愛の現実の形がいびつになって、両作品の主人公の父親は共に自らを死にいたらしめるのである。

それでは、その愛の現実への現われを誤らせたのは一体何だったのだろうか。Whalley の場合それは主に彼の自尊心だったと思われるが、Almayer の場合は自尊心よりもっと空しい種類の幻想だったと言えよう。そのような幻想が Almayer の人生の唯一の真実であった娘への愛をいびつにしたと考えられる。この小論では、この Almayer に取り憑いて彼の人生を狂わせた幻想を中心に、ほかの様々な幻想のはびこり方を見てゆきたい。そして、そのような幻想の跋扈が凝視されていることの意味を合わせて考察してみたい。

II

Almayer's Folly は副題が“A Story of an Eastern River”となっている通り、その作品世界の中心を大きな河が流れている。そしてその絶えることを知らない一方的な流れは、あらゆる人の内面を流れている自愛的な幻想が人をその奴隷にしていくときの一方性を具象化しているのではないか、と思われることがときにある。例えば、主人公の Almayer にとって河の音は、ほとんど常に“the song of hope . . . of triumph, of encouragement”であり、“better days”が来るといふ“the whisper of consolation”であった。(p. 162) それを見ながら彼は、その流れに自分の夢を乗せて、果てしない思いに幾たび耽ったことであろう。彼の生活の場を流れるその河は、彼の頭の中を流れる幻想としばしば合流して、彼を遠い空想の世界に運んだのである。

この Almayer の夢想癖は、彼の双親から養い育てられたと見ることもできる。というのも、Java 島 Buitenzorg の植物園に勤めていた彼の父親は、植物園の原住民園丁の愚かさについて一日中不平をこぼしていたし、Amsterdam のタバコ商人の娘だった母親は、その町の昔の栄光と娘時代の境遇をいつもなつかしんでいたからだ。言わばこの二人は、さえない日常の現実を容認しようとしなない典型的なボーヴァリストだったのである。(p. 5)

この二人から育てられた Almayer が、現実離れた夢に耽ったり、逃避的な性格を強めていったりするのも無理のないことかもしれない。しかも、この彼の前に、普通の人でもその誘惑にたやすく屈してしまいそうな悪魔的人物が姿を見せるのだ。それは、当時「海の王」“the Rajah-Laut”としてその名を東南アジア一帯に知られていた Tom Lingard である。Lingard は、昔退治したマレーの

海賊の遺児に白人男性の婿を迎えてやらなくてはならないという差別意識と感傷主義の入り混じった固定観念に囚われていたため、Macassarの貿易商Hudigのもとで働いていた青年Almayerに目をつけ、彼を大いに可愛がり自分の仕事を手伝わせて、頃を見計りある時、養女にしたマレー娘の婿になってくれるよう彼に話をもちかけたのである。

Almayerが結局この話を承知したのは、マレー人の娘が気に入ったからではなく、Lingardがこの娘に自分の全財産を譲ると言ったからである。Lingardが大金持だということを周囲の人たちから散々聞かされていたAlmayerは、東洋人に対する強い差別意識をもっていたにもかかわらず、莫大な遺産の魅力に屈し、結婚に同意したのだ。その結婚が幸せなものにならなかったのは当然だったが、Almayerにとって何よりも誤算だったのは、結婚の報酬として、Lingardの繁栄の源になっていた秘密の僻村Sambirの代理人に彼がされたあとも、経済的に彼が一向豊かにならなかったことである。それは、彼がSambirに住みこんでまもなくアラビア人の商人がそこに入りこんで来て、彼から商売をどんどん奪っていったからである。ちょうどその頃Lingardは徒労に終ることになる金鉱探しに出かけていたうえ、Almayerは、妻からも憎まれ軽蔑されて、未開の地で孤独と不如意の生活に苦しみながら、己れの運命を呪うようにさえなる。ただ、このような逆境の中で、大金持になって華やかに暮す彼の夢だけは、その光を一層強めていったのだった。

それに、彼のこの夢に生気を与える者が、彼の実生活に一人もいないわけではなかった。彼には、最愛の娘Ninaがいたのである。Ninaは、虚妄の夢による偽りの結婚から生まれながら、父親から深く愛され、彼の人生の唯一の真実になっていたのだ。この娘への愛という支えを得てAlmayerの夢は、厳しさを増す環境の中で一層華やかになっていったのである。さらにこの夢は、まだ幼いNinaが教育を受けるためSingaporeに連れて行かれ、10年後に美しい娘に成長して帰って来てからも、一向に色あせる気配を見せなかった。逆に、Ninaが帰ってきたのは混血児ゆえに差別され虐待されたためらしいと分かってAlmayerは、彼女を幸せにするためにも巨万の富がどうしても欲しいと一層強く思えようになるのである。。そのため彼は、金鉱を探す資金をヨーロッパまで調達に行ったきり消息をずっと絶っていたLingardに代って金脈を発見したいとまで思い始める。加えて丁度この頃、この探鉱の手助けをしてくれる頼もしい若者がAlmayerの前に現われるのだ。この若者はBali島の酋長の息子で名をDain Maroolaと言い、上辺は交易商人だが実はオランダと闘うための武器の密輸のためAlmayer

に接近したのである。Almayerはこの密輸に手を借す代償として金脈探鉱の旅に出てくれるよう要請し、Dainもこれを了承したのだった。

ここで物語の時間の流れは、ようやく作品の冒頭に達する。すなわち作品は、Dainが火薬を密輸して帰ってくるのをAlmayerが待ちわびているところから始まっているのだ。彼はDainが帰って来たらすぐ一緒に探鉱の旅に出ようとしていたのである。物語の主要な事件は、この時から始まってわずか二日にも満たない時間のうちに生起する。この短い時間の間にAlmayerは、甘美な夢の高みから耐え難い現実の底に突き落されてしまうのだ。時間の短さは結局、Almayerの夢の高まりと崩壊をドラマチックに提示するための効果的な方法になっていると言えよう。Almayerの過去はこの時間の最初あたりでフラッシュ・バックの方法などを通して手際よく読者に伝えられるのである。

さて、DainはSambirに戻って来るが、それはAlmayerと共に金鉱発見の旅に出るためではなかった。彼は密輸に失敗して危険を承知でSambirに逃げ帰ったのだが、それは、いつしか相思相愛の仲になっていたNinaをBali島に連れて行くためだったのだ。Dainが戻って来ただけで金鉱が見つかったような喜び方をしたAlmayerは、自分の知らないままに愛し合い逃げ去ろうとしているDainと娘の二重の背信行為にたちまち絶望の底に突き落されてしまう。今まで何度も失望を味わってきたAlmayerだったが、今度ばかりは痛手が大きすぎて新たに希望を回復できないまま自滅していくのである。このAlmayerの自滅の姿は最後に詳しく見ることにして、次に、彼を取り巻く人々の幻想を中心に考察してみよう。

III

人間は、もし幻想の流れに身を浸すことができなくなれば、一体どうなるであろうか。それは、Almayerが自分の夢の中心にいた娘のNinaの背信について知らされたあと、河のつぶやきに合わせたように鳴る自分の心臓の鼓動を聞きとったとき明らかにされていると言えるかもしれない(pp. 162-163)。幻想から完全に見離されてしまえば、人は、このAlmayerのように自分がただ心臓が動いているだけの生き物にすぎないことをまず自覚するかもしれない。Almayer自身実感したように、このような状態の持続に耐えられる人は誰もいない。人はしばしば無意識のうちに機械的に考え行動しているのに、自らを機械と同じであると意識して生き続けることはできないのである。

幸か不幸か人は、心臓がポンプのように動くだけの機械的な存在としての自分には耐えられなくても、幻想によって操り人形のように動く自分には無批判のどころか自己満足的にすらなれる。それは、幻想が往々根源的なナルシズムから発するからである。Conradがしみじみも洞察した通り、自愛的な幻想が無くなれば人類は絶滅するほかないのかもしれない。このような幻想と人間の関係をやや不気味によく示していると思えるのは、河のほとりの森林に生える大木とそれにかからまる寄生植物である。寄生植物は、死というあらゆる生物にとって避けられない宿命が、幾世代もの木が倒れて朽ちているという形で視覚化されているうす暗い森の中で自らを養って与えている大木を死にまで追いこみながら、ピンクやブルーの花を咲かせるのである。

Only the parasites seemed to live there in a sinuous rush upwards into the air and sunshine, feeding on the dead and the dying alike, and crowning their victims with pink and blue flowers that gleamed amongst the boughs, incongruous and cruel, like a strident and mocking note in the solemn harmony of the doomed trees. (p. 167)

下には無数の木が倒れ朽ち、立っている木も枯死しかかっているというのに、寄生植物だけは場違いで残酷な感じさえ与える花をきらめかせながらおい茂っている。その繁茂の仕方は、人に華やかな夢を見させ続けていつか死に追いやる幻想のはびこり方を思い起させる。特にそれが Almayer と Taminah の幻想のばっこを思わせるのは、二人が共に一つの固定した幻想によって直接死に追いやられるからである。しかし、ほかの登場人物も、様々な幻想に突き動かされて危険な目にあわないわけではない。例えば Dain は、Nina に会いたい一心で死の危険も顧みず Sambir に戻ってくる。そして、隠れ場所で彼女を待ちうけているあいだ、敵が来たら華々しく戦って死のうと思ひ、敵の返り血を浴びながら死んでいく自分を夢想して陶然となる。それでいて彼は、Nina と会ったあとでは死ぬことに耐えられないと思ひ、自分の“bravery”に不安を覚え自分が信じられなくなる。このように恋は、人をこの上なく勇敢にすると同時に臆病にする。それは、恋が人を激しく生に執着させ、想像力を強く刺激して様々な幻想を人に見させるからである。この幻想によって人は、勇敢にも臆病にもなるのだ。

前にも少し触れたが、幻想という寄生植物に生命の素を吸いとられて実際に死んでいくのは、作中では Almayer と Taminah の二人である。特に后者は作品の

主題を根源的な形で表していると思われるが、それは、彼女が彼女によく似た Amy Foster や Falk のようなほかの作品の登場人物と共に自然に最も近い存在であり、そのために幻想が彼女において最も純粹で根源的な形をとるからである。彼女同様の性的幻想に捕えられる Nina や Dain が文明にずっと近いと感じられるのは、彼ら二人が自分たちの生きる社会的な場のことを忘れるわけにはいかなかったのに対し、Taminah にはそれが考えられなかったからである。彼女は女奴隷として家畜のように生きなければならなかったものであり、そのことの不当性については何も考えられなかつし、また実際何も考えはしなかつた。彼女はただ Dain に対する遂げられない恋の思いに取りつかれた自分をどうすることもできず、ただ身を憔悴させていくだけだったのだ。

この女奴隷 Taminah と身分的に正反対の位置にあると自分で勝手に思いこんでいるのは Almayer である。彼は、自分が Borneo の東海岸でただ一人の白人であるという自負心をアラビア人の Abudulla に商売をすっかり横取りされたあとでも、決して失わなかつた。その彼が皮肉なことに、身分の最も卑しい Taminah と同様、幻想の痛ましい犠牲者になり果てるのである。それは、Almayer が Taminah と同じように、去っていった愛しい者をどうしても忘れることができなかつたからである。このように、対照的な人あるいは物や状況などを並置する手法は、恐らく Conrad が Flaubert などから学んだものだろうが、処女作の *Almayer's Folly* においてすでに頻繁に用いられている。例えばそれは、強力な対他幻想によって死に追いやられた Almayer や Taminah とは対照的に、特別に愛する者をもたないため比較的安全な人生を送っている Lakamba と Babalatchi という二人の原住民の幻想を捉えるときにも用いられている。二人は、Lakamba がその地方の首長“Rajah”で Babalatchi がその腹心の家来というように身分は違っている、利害関係を共にしてきた老人同士であり、老人らしく鬭争的な生から離れて静かに余生を送りたいと考えている。そう思いながら二人は、その旺盛な物欲にそそのかされて、Almayer の宝探しに一役買うためあえてオランダ政府にさからうような危険を冒す。つまり、当時オランダと敵対関係にあった Bali 島の Rajah の息子 Dain に火薬が購入できるようにしてやり、その代償として彼に金の鉞脈探しに行ってもらおうとしたのだ。しかし、Dain がオランダの監視艦に見つかって Sambir に逃げ戻ったため窮地に立たされた Lakamba と Babalatchi は、一刻も早く彼に Nina を連れて逃げてもらおうとするが、そのとき彼らは、Almayer がオランダの将校に捕まって金鉞のありかをしゃべるかもしれないと考え、その前に彼を殺してしまおうとする。この場面

は、Albert J. Guerard から “the Malayan local color and picture of Sambir, and the insight into native psychology” がよく描かれていると称揚されて、その文章が長々と引用されている箇所である。私もまた同じところを引用するのは、ここが、Guerard には捉え切れなかった大きな意味を含んでいると思うからだ。

“Almayer must die,” said Lakamba, decisively, “to make our secret safe. He must die quickly, Babalatchi. You must do it.”

Babalatchi assented, and rose wearily to his feet. “To-morrow?” he asked.

“Yes; before the Dutch come. He drinks much coffee,” answered Lakamba, with seeming irrelevancy.

Babalatchi stretched himself yawning, but Lakamba, in the flattering consciousness of a knotty problem solved by his own unaided intellectual efforts, grew suddenly very wakeful.

“Babalatchi,” he said to the exhausted statesman, “fetch the box of music the white captain gave me. I cannot sleep.”

At this order a deep shade of melancholy settled upon Babalatchi's features. He went reluctantly behind the curtain and soon reappeared carrying in his arms a small hand-organ, which he put down on the table with an air of deep dejection. Lakamba settled himself comfortably in his arm-chair.

“Turn, Babalatchi, turn,” he murmured, with closed eyes.

Babalatchi, his hand grasped the handle with the energy of despair, and as he turned, the deep gloom on his countenance changed into an expression of hopeless resignation. Through the open shutter the notes of Verdi's music floated out on the great silence over the river and forest. Lakamba listened with closed eyes and a delighted smile; Babalatchi turned, at times dozing off and swaying over, then catching himself up in a great fright with a quick turns of the handle. Nature slept in a exhausted repose after the fierce turmoil, while under the unsteady hand of the statesman of Sambir the Trovatore fitfully wept, wailed, and bade good-bye to his Leonore again and again in a mournful round of tearful and endless iteration.

(pp. 88-89)

Guerard はここで用いられている “method” が Conrad にとってまことに

“congenial”なものだったと述べているが、ただ「性に合っている」という自然に密着した理由だけでこの二人のマレー人の喜劇的な関係が描きこまれているわけではない。ここには、殺人計画という野蛮に音楽という文化がこともなげに繋がられていて、未開人と文明人という対立図式を越えて人間そのものを捉えようとしている Conrad のラディカルな姿勢が窺われるのだ。Guerard のように、毒殺計画と Verdi の音楽鑑賞が違和感なしに連続していく生活感覚に “native psychology” を見て満足する論者がいるとすれば、その人は、*Almayer's Folly* の Author's Note において Conrad 自身からその視野の狭さを批難された文芸界では著名なある婦人とほとんど変わらない意識水準にとどまっていると言えよう。このような白人の偏見、つまり、19世紀の東南アジアという未開の地の原住民は自分たちとは根本的に違うのだと考える白人の自尊の念にあふれた偏見を、Conrad ほど痛烈に打ち砕いた作家はいなかったように思われる。Conrad がヨーロッパからはるかに離れた地に住む褐色の肌の人々と白人の間に見ていたのは、同じ人間としての “bond” (p. viii) にほかならなかった。それはつまりとて、あらゆる人が幻想の河に押し流されていく哀れな生き物にすぎないという認識から生じた絆である。Conrad によれば、人は白人であろうとなかろうと天から与えられた重荷である “the bitterness of our wisdom” と “the deceptive consolation of our folly” に耐えねばならないのだ (p. xiii)。

上掲の引用文でこの最後の “deceptive consolation” に典型的に押し流されているのは Lakamba である。彼は、めずらしく Babalatchi の知恵を借りずに重要なことを思いついたためすっかりいい気持になり、音楽を聞きたいとさえ言い出す。殺人計画の直後に音楽鑑賞というこの Lakamba の欲望充足の形に、「夕べにゲーテやリルケを読み、バッハやシューベルトを演奏しながら、朝にはアウシュヴィッツで一日の業務につくことができ」たナチ党員のことを思い起こす人がいるかもしれない。「そんなことができる人間は、ゲーテ読みのゲーテ知らずだとか、そんな人間の耳は節穴も同然だとか」言うのは、George Steiner の洞察する通り、「逃げ口上」であり「偽善」である。そのことを Conrad は「アウシュヴィッツ」より何十年も前に凝視していた、それは彼が、あらゆる人をその奴隷にする自愛的な幻想の力を熟知していたからである。自愛的な幻想に取り憑かれれば人は、西洋人であろうと東洋人であろうと関係なく、何の矛盾も感じないで殺人から音楽鑑賞に移れるのだ。

Lakamba が自分の知恵を出したことに得意になり、音楽を聞いていい気分になっているのとは対照的に、Babalatchi はその日の心労に疲れはて、蓄音機の

ハンドルを回すことにも“hopeless resignation”を感じている。自らの意志で生きていると実感している前者に対し、後者は、他人の意志に支配される奴隷のような気持なのだ。ところが、このように正反対の気分支配されながら二人は、作者から等質の構造の中に捉えられているのである。それは、欲望を充足させて満足している Lakamba もまた空しい奴隷にすぎないと作者が見ているからだ。彼も Almayer や Babalatchi 同様、物欲に取り憑かれて右往左往している哀れな幻想の隷属者にすぎないのである。

興味深いのは、自らの機械的な手仕事によって素晴らしい音楽を流している Babalatchi と、Sambir という大きな舞台の演出者である Babalatchi が、やはり等質の構造の中に捉えられていることである。賢明な彼は、様々な状況にすばやく反応してどのように行動したらよいか考え、その考えを Lakamba に進言して受け入れさせることによって、ほとんど常に自分の思い通り Sambir の政治を動かしてきた。彼は言わば、Sambir という舞台の実質的な演出者だったのであるが、その彼に蓄音機のハンドルを回させることによって Conrad は、賢者 Babalatchi の生き方の相対化とその意味の重層化をねらっている。蓄音機から流れ出る Verdi の *Il trovatore* はちょうど主人公が愛しい Leonore に悲しい別れの気持を情熱的にうたいあげているところであるが、このような男女の情愛は、Babalatchi が高みに立ってしばしば巧みに利用しようとしたものにほかならない。彼は、性的衝動がいかに圧倒的な力をもっているかを熟知しており、そのためそれに取り憑かれた男女の機械的な動きが先まで読めて、それに対する方策をたてることができたのだ。その彼が、男女の愛をとうとううたう音楽を自らの手で流すことには絶望的な気分になるのである。それは、彼が疲れているうえ音楽があまり分からなかったからだろうし、何よりも、蓄音機のハンドルを回す動作が機械的だったからだろう。しかし、機械的というこのになれば、物欲の虜になった彼が Almayer の身边に絶えず現われては金脈のありかを聞き出そうとしたその生活行動自体が機械的なのである。そのような機械性が彼を絶望させなかったのは、物欲が彼に様々な夢を見させたからである。それに対して、蓄音機のハンドル回しという機械そのもののような動きは、音楽のあまり分からない彼に何の夢も見させなかったというだけなのだ。

Conrad が Babalatchi の行動の二種類の機械性提示によってねらったのは、前にも述べたように、それらが相互に相手の意味をきわだたせたり拮げたりする相乗作用である。その結果は、賢者 Babalatchi にも見通せなかったが、私たち読者には看取できるのだ。Babalatchi には、自分が機械人形になっていることを

はっきり自覚させてくれる機械性によって、そのことを意識させない機械性を捉え返す視点が最後までもてなかった。が、私たちにはそれができるのであり、少なくとも本を読んでいるあいだは、彼より賢くなれるのである。

とはいえ、そのような私たちにも、Babalatchi が若い Taminah の魅力にひかれて、彼女が恋煩いでどんどんやせていたにも拘わらず彼女を大金をはたいて買い取ったことさえ、簡単にあざ笑えないだろう。男女間のことはかなり先まで見通せたはずの Babalatchi が信じられないような愚行を犯すのを見て笑える人は、まだ幻想のあなどり難さが本当に分かっていないのだ。それが本当に分かれば、Babalatchi は言うに及ばず、Lakamba でさえあざ笑う気にはなれないかもしれない。それほど私たちは幻想の闇に飲みこまれやすい生物なのだが、この問題を最後に、娘に逃げられて生きる気力を失った Almayer と彼の飼っているサルとの交渉を観察することによって、考えてみたい。

IV

Almayer は、探鉱の計画を反古にしたうえ、愛娘まで奪い去ろうとしている Dain を娘と共に追手のオランダ将校たちから逃してやろうと決心する。それで二人を河口の小島まで連れて行き、そこで Bali 島から来ることになっている船を待つのだが、その間彼は、実に久しいあいだ海を見ていなかったためキラキラ輝くその水面に見とれてしまい、自分がなぜそこにいるのかも忘れてしばし忘却の至福にいこう (p. 188)。海は、Conrad が生まれて初めてそれを見て船乗りになる決意を固めたときのように、あらゆるものをそこで無化するという浄化作用を常に繰り返してきたのである。

もちろん海は、あらゆるものをそこで無化しながら、同時にそこからあらゆるものを生み出している。その無限の変容に対応できなければ、人は、石のように海の底に沈んでいくほかない。この石の宿命を Almayer が辿ることになるのは、彼が海によって折角その心を空ろにされながら、娘のことは忘れなければならないという依怙地な固定観念にすぐに支配されてしまい、以後自分の人生を今まで以上に狭く閉じてしまったからだ。彼は、娘が立ち去ったあとの砂浜に残された彼女の足跡を四つんばいになって一つ一つ消していくという愚かしも哀しい行動を手始めにして、彼女を忘れるための systematic な行動を繰り返すのであるが、その彼の心を捉えていたのは、死ぬ前に娘のことを忘れなければ永遠に思い出ししてしまうのではないかという恐怖に似た思いであった。

こっけいなことに、この思いに取り憑かれて Almayer が思わず大きな声で“Eternity!”と叫んだために、彼の傍らにいたサルがびっくりして手にもってズタズタに裂いていたバナナの皮を落としてしまうのだ。Almayer 自身この言葉によって自分がやらなければならないことを思い出して早速とりかかる。すなわち、娘の子供時代の思い出が一杯つまっている古い家を燃やしてしまおうとするのである。注目すべきは、この悲しくも愚かしい行動に一途になって取り組む Almayer と、傍らでバナナの皮を夢中で引き裂いていたサルが、等質の構造の中に捉えられていることだ。両者は、“Eternity”という言葉によって一瞬ハッとさせられるが、共にその行動とか心の動き方の機械性が改まることは決してないのである。結局、“Eternity”とは両者の行動と意識のあり方の機械性のことではないかと思えるが、ここで Conrad が意図していることは、サルの行動の機械性によって人間の行動や考え方の機械性を卑め蔑視することでは決してない。確かに、二つの機械性はその馬鹿馬鹿しさにおいてちょうど釣り合っていると言えるかもしれない。また、どうしても娘を忘れることができない Almayer がついに暗い部屋に閉じ込めて戸外へ出ようとしなくなったため、サルが彼の手を引いて外に連れ出すとき、私たちはサル以上に愚かになった彼の姿をそこに見ることができると言えるかもしれない。

しかし、この等質の構造は逆にまた、両者の異質性も明確にせざるをえない。すなわち、サルと同等かそれ以上に Almayer を落ちこませているものが、愛する者を忘れようとするほど逆にはっきり思いだしてしまうという哀しき人間的な特質であるということを明確にせざるをえない。子供時代の娘のことをどうしても忘れられず、その幻にやさしく語りかけ、笑ったり泣いたりした挙句、その幻に向こうへ行ってくれと懇願する Almayer の姿は、滑稽であることを通り越して哀切でさえある (p. 202)。Conrad が Almayer をユーモラスに突き離してサルと等質の構造の中に対象化したのは、このいかにも人間的な Almayer、強力な幻想によって精神に異常をきたし、人間の哀しい弱さをまる出しにしている Almayer を見つめ続けることを通してであったのだ。

結局 Conrad は、Almayer のような誰にも容易に批難できる人物を主人公にしながら、その人物を冷たく対象化するだけで終ることを、彼をより高級な人間と関連付けることによってではなく、全く逆にサル以下のレヴェルに置くことによって避けたのである。このことによって Conrad は、サル以下に落ちこんだ人間の愚かしさに哀切感を漂わせるというこの上なく包括的な表現法を獲得したのだ。三十代半ばだった Conrad にこれが可能になったのは、様々な理由が考えられよ

うが、一つは彼が被圧迫民族の一員として圧迫する側とされる側の愚かさを嫌というほど見せつけられながら、それを高みに立って否定するのではなく、自らも愚かさを共有する人間として、その表現化に努めたからであろう。

註

- 1 Norman Sherry, *Conrad's Eastern World* (1966; rpt. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1976), p. 30.
- 2 G. Jean-Aubry, *Joseph Conrad: Life & Letters*, 2 vols. (London: Heinemann, 1927), I, p. 95.
- 3 Joseph Conrad, *The Mirror of the Sea and A Personal Record* (London: Dent, 1946), p. 87.
- 4 Ian Watt, *Conrad in the Nineteenth Century* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1979), p. 34.
- 5 Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1958), p. 71. R. A. Gekoski, *Conrad: The Moral World of the Novelist* (London: Paul Elek, 1978), p. 43.
- 6 Joseph Conrad, *Almayer's Folly and Tales of Unrest* (London: Dent, 1947), p. 7. 以下、*Almayer's Folly* から引用する文の頁数は本文中に示す。
- 7 Guerard, p. 72.
- 8 *Ibid.*, p. 73.
- 9 G・スタイナー『言語と沈黙』由良君美他訳（せりか書房、1969年）、上巻、p. 12。
(昭和62年4月28日受理)